

1月27日（木）に、福島市公立学校教職員研究報告会というものがあった。私は、学習指導一般部会の部会責任者として進行等を務めた。今回は、コロナの状況によりオンライン開催となった。本部や事務局のような所に人が集まることもなく、完全に各学校からの参加となった。

学習指導一般部会の参加者は、名簿によると315名である。各学校で密を避け、一つの会場につき5人程度の人数で視聴する態勢がとられた。オンライン会議への参加数は53だった。計算すると、平均6名ぐらいずつで参加していただいたことになる。

初任者のSS先生に声をかけた。「前半は、2年次フォローアップ部会に出るとして、後半はどうするの?」「特に決めていません」「では、学習指導一般に出てみたら。2つの学校がどんな研究をしているのかわかるよ。ついでに、質疑応答の時間があるから、質問をしてみたら」「はい、わかりました」

各学校からのオンライン会議が、果たしてうまくいくのかどうか、運営責任者としては心配であった。しかし、それは杞憂に終わった。いたってスムーズであった。2つの学校の発表が終了し、質疑応答の時間となった。手はず通りに、SS先生が質問をした。自分は初任者であること、授業を行う上で、学習課題について考えていること、特に生徒から問いを引き出すにはどうすればよいか悩んでいることなどを発表者に伝え、問いの引き出し方について質問をした。

SS先生からすれば、一人の授業者として悩んでいることを質問したのだが、これは難問である。この疑問に答えるのは容易なことではない。本人は滑らかに話せたわけではない。それがかえって等身大の好感もてる質問として参加者には映ったのかもしれない。

その日の夕方になり、SS先生が電話を片手に沈痛な面持ちで誰かと話をしていて。あの様子は部活動のことかと心配したが、報告がなかったため、自力で解決できたのかと思っていた。その後、質問をしてくれたことへのお礼とコメントを本人に伝えたところ「校長先生、実は・・・」ときた。

話を聞くと、沈痛な面持ちの電話の相手は、他の中学校の先生だった。SS先生の質問を聞いて、彼の質問内容は鋭い指摘であること、自分たちも生徒から問いを引き出すことを研究しており、ぜひ授業を見に来てほしいこと、加えてアドバイスもいただいたことなどを聞いた。初任者が、他の学校の先生から鋭い指摘だと褒められたというのである。

さすがに驚いた。SS先生が英語であることは知っていたらしいが、その先生は理科の先生だった。それも面識はないという。すなわち、こういうことである。他の学校の知らない先生からSS先生に電話がきた。SS先生は、何かしたかと身構えた。その先生は、SS先生の質問を褒め、アドバイスを送り、授業を見に来るように誘ったとなる。

オンラインでのモニター越しでも、SS先生の誠実さや初任者ながらも熱心に授業に取り組んでいる何かが伝わったのだろうと思う。そうでなければ、こんな展開にはならないであろう。SS先生に尋ねた。「SS先生、あなたが質問をするように場の設定をしたのは誰だっけ?」「校長先生です」「そうね」「ありがとうございました」「場の設定は大事だね」驚きながらもうれしかった。

先週で県立高校入試前期選抜が終了した。SS先生は、3年生の英語の授業を担当している。気が気でないだろう。英語に関しては、自分に責任がある。彼は、そう思うはずである。その謙虚さと誠実さが生み出した、うれしい今回のエピソードである。